

疥癬の予防法と発生時の対策

神奈川県・(有)豊浦獣医科クリニック 村田 知

はじめに

疥癬は、穿孔ヒゼンダニまたはブタニキビダニの寄生によって起こる皮膚炎で、激しい掻痒感(カユミ)、脱毛、痂皮(カサブタ)の形成などを伴います。病変としては、体表のみに限定されますが、実際の被害としては、種豚群での栄養状態や免疫状態の低下を現していることから、多くの事柄に関係しています(表1)。

このことから、特に冬を越してきた種豚での皮膚炎の発生状況は、その年の繁殖成績や肥育成績を予測する上で重要な事柄となります。つまり、春先に母豚の疥癬を含めた皮膚炎が増加している場合は、母豚の消耗が激しいことを現していることから、春〜秋にかけての受胎率低下や産子数低下などの繁殖成績への影響の発生、また、種豚と子豚両方の免疫低下の影響を現していることから、夏〜秋生まれの子豚での慢性病発生など、その農場や地域にある疾病のどれが発症してもおかしくない

状況になってしまっているといっても過言ではないと思います。このことは、AD・PRRS・PCV2などの消耗性のウイルス疾患が影響している場合に特に顕著に現れることから、母豚の疥癬の発生状況をチェックすることはとても重要な事柄になっていきます。

予防方法

予防は、ダニの駆除が第一になります。駆虫には、ドラメクチン製剤またはイベルメクチン製剤が有効です。また、これらの薬剤で駆虫を行う場合には、以下の事柄に注意して実施しないと、駆虫効果が低下してしまうことがあるので、注意が必要になります。

- ①卵には駆虫効果が及ばないため、ダニの発育史を知り、その周期に合わせた駆虫・消毒を行います(表2)。
- ②駆虫は、接触する群単位で一斉に行います。ストールや群飼で接触する列または豚舎ごとに一斉に駆虫を実施する必要があります(再感染に

表1 疥癬の影響

直接の影響	裏に隠れているもの
①かゆみによるストレス	①PRRSやPCV2ウイルス感染によるタンパク質の消耗
②ワクチン接種の抗体応答の低下	=種豚群でのPRRS・PCV2の水平感染増加
③と場出荷時の問題	②アレルギー反応による免疫細胞の興奮
	=母豚自身の感染防御能の低下
	=子豚への付与免疫の質と量の低下
	③皮膚の穿孔により感染防御をすり抜けるため、細菌の経皮感染→敗血症増加

表2 ダニの発育

卵→孵化	3～5日
卵～成ダニが産卵するまでの期間	平均10～14日
成ダニの産卵期間	2～3日間隔で2カ月間、1日2～3回産卵

表3 駆虫方法（例）

注射剤	①ドラメクチン製剤 ②イベルメクチン製剤 =①と②の組み合わせにより駆虫を実施	分娩前7～8週：接触する列または豚舎ごとに投与 分娩前2週：状況により、全頭または皮膚病変の残っているものへ投与
添加剤	イベルメクチン製剤	種豚全頭に一齐投与：7日間実施 =分娩と交配の前後のそれぞれ14日間は避けた方がよい

よって、駆虫効果が認められなくなつてしまいます。
③この場合、注射によるウイルスのまん延を防ぐための針の管理も重要となります。
④授乳中の母豚を駆虫する場合、同時に哺乳豚への駆虫も必要です。



写真1 軽度の発症
皮膚が黒ずんでいる程度

⑥一頭でも駆虫に漏れがあると駆虫効果は消失してしまいます。特にプレミックス給与では、食下量を確認し、食下量が低下する時期の給与は避け、さらに、食下量の少ないものや食滞豚に対しては、注射による追加投与が必要になります。

⑤分娩舎導入時までに駆虫によってダニを落としておく必要があります（分娩舎導入時の豚体洗浄と消毒、分娩前の豚房の消毒も必要です）。



写真2 写真1の治療後
皮膚の黒ずみがまったくなくなった状態

駆虫以外の予防方法としては、種豚群の抵抗力低下を抑えることが重要になります。
この種豚群の抵抗力を低下させる要因としては、
①飼料中のカビによる免疫力低下とアレルギー反応による消耗、

駆虫以外の予防方法

⑦雄豚への投与漏れにも注意しましょう。
⑧駆虫薬を未投与の出荷予定母豚は、確実に隔離しておく必要があります。

③ 体感温度低下を防ぐために、豚に直接風を当てないで入気量を確保する飼養管理方法の

② タンパク質不足による消耗、
 ③ 乾燥による粘膜の抵抗力低下と消耗、
 などが主に認められています。
 これらに対して、
 ① 飼料中のカビ数検査の実施と、それに合わせた防黴剤、黴毒吸着剤の投与、
 ② 種豚群間での PRRS や PCV2 ウイルスの水平感染防止（I 新たな株の侵入防止 II 地域・農場ごとの防疫が重要、II ウイルス血症を起こしている種豚の排除 III PCR 検査による選別、III 農場に居付いているウイルスの排除 II 水洗・消毒）、



写真3 重度の発症例
 疥癬病変+アレルギー反応+サシバエによる病変の悪化

表4 抗アレルギー作用のある薬剤

甘草：飼料添加剤	健乃友：0.1%添加
グリチルリチン：注射剤	強力ミノファーゲン：1ml/10kg投与



写真4 四肢の軽度の疥癬と乳房の微小膿瘍
 黒いカサバタ状の湿疹

確立、
 などの対応を行うことも重要です。
 従って、これらの対応がうまくいっていない場合に、ウイルスの動きが活発になった結果として、種豚群でのウイルスの水平感染に伴って、疥癬症状の広がり認められているというケースが多く認められている

のが現状であると思われます。
 つまり、疥癬を含めた皮膚病の状況が、母豚の栄養状態、免疫状態だけでなく、種豚群での PRRS や PCV2 ウイルスの感染状態の指標にもなっているものと思われ、疥癬対策を行うと同時に、これらウイルスの種豚間での感染状況も考慮し、P

治療方法

治療にも、ドラメクチン製剤また

RRS や PCV2 対策も強化した全体的な対応を行うことも重要になります。

はイベルメクチン製剤が有効です(表3、写真1、2)。しかし、症状としては、ダニの数が少なくてもアレルギー症状で重篤になっているものも多く認められています(写真3)。このような場合、抗アレルギー作用のある薬剤として、甘草(グリチルリチン)の注射・飼料添加が有効です(表4)。

また、細菌の二次感染により黒い痂皮(カサブタ)が形成されていて、哺乳豚・子豚などでスス病発症などの細菌感染が認められているケースでは、抗生物質投与も併用する必要があります(写真4)。この場合の抗生物質の選択は、多剤耐性を持った *S. hyicus* (スス病の原因菌) や *S. aureus* (ブドウ球菌) などが存在するため、子豚でのスス病発生時に菌分離を行って、薬剤感受性を確認して使用する必要があります。この感受性確認を怠って、母豚に対して、抗菌力の強さや抗菌スペクトルの広さのみで薬剤を選択して使用した場合、その後に病原性大腸菌症やサルモネラ症、スス病の発症などが起こったケースも実際に認められており、

母豚の腸内細菌叢のバランスを崩さないことや、耐性菌を出現させないことへの注意が大切になります。

また、疥癬の治療効果の判定や、ダニの駆虫対策の必要性の有無を客観的に判断する材料として、“かゆみ指数”による判定のノウハウを保有しているところもあります。

おわりに

疥癬の発生は、単なる皮膚病というだけでなく、種豚群の抵抗力が低下した結果であると考えると、それ自体の対策だけでなく、その裏にあるウイルス感染や細菌感染などへの対処も必要になるということもご理解いただけたと思います。特に毎年見られるような、夏・秋生まれの子豚での影響の大きさを考えると、まさに今妊娠中の種豚群での状況判断と対応が重要となっています。

